松山鏡

楠山正雄

一

むかし越後国松（えちごのくにまつ）の山家（やまが）の片田舎（かたいなか）に、おとうさんとおかあさんと娘（むすめ）と、おやこ三人（にん）住（す）んでいるうちがありました。

ある時（とき）おとうさんは、よんどころない用事（ようじ）が出来（でき）て、京都（きょうと）へ上（のぼ）ることになりました。昔（むかし）のことで、越後（えちご）から都（みやこ）へ上（のぼ）るといえば、幾日（いくにち）も、幾日（いくにち）も旅（たび）を重（かさ）ねて、いくつとなく山坂（やまさか）を越（こ）えて行（い）かなければなりません。ですから立（た）って行くおとうさんも、あとに残（のこ）るおかあさんも心配（しんぱい）でなりません。それで支度（したく）が出来（でき）て、これか

ら立(た)とうというとき、おとうさんはおかあさんに、

「しっかり留守(るす)を頼(たの)むよ。それから子供(こども)に気(き)をつけてね。」

といいました。おかあさんも、

「大丈夫(だいじょうぶ)、しっかりお留守居(るすい)をいたしますから、気(き)をつけて、ぶじに早(はや)くお帰(かえ)りなさいまし。」

といいました。

その中で娘(むすめ)はまだ子供(こども)でしたから、ついそこらへ出かけて、じきにおとうさんが帰(かえ)って来(く)るもののように思(おも)って、悲(かな)しそうな顔(かお)もしずに、

「おとうさん、おとなしくお留守番(るすばん)をしますから、お

みやげを買ってきて下さいな。」

といいました。おとうさんは笑いながら、

「よしよし。その代わり、おとなしく、おかあさんのいうことを聴くのだよ。」

といいました。

おとうさんが立って行ってしまうと、うちの中は急に寂しくなりました。はじめの一日や二日は、娘もおかあさんのお仕事をしているそばでおとなしく遊んでおりましたが、三日四日となると、そろそろおとうさんがこいしくなりました。

「おとうさん、いつお帰りになるのでしょうね。」

「まだ、たんと寝なければお帰りにはなりませんよ。」

「おかあさん、京都ってそんなに遠い所なの。」

「ええ、ええ、もうこれから百里の余もあって、行くだけに十日あまりかかって、帰りにもやはりそれだけかかるのですからね。」

「まあ、ずいぶん待ちどおしいのね。おとうさん、どんなおみやげを買っていらっしゃるでしょう。」

「それはきっといいものですよ。楽しみにして待っておいでなさい。」

　そんなことをいいいい、毎日暮らしているうちに、十日たち、二十日たち、もうかれこれ一月あまりの

月日がたちました。

「もうたんと、ずいぶん飽きるほど寝たのに、まだおとうさんはお帰りにならないの。」

と、娘は待ち切れなくなって、悲しそうにいいました。

おかあさんは指を折って日を数えながら、

「ああ、もうそろそろお帰りになる時分ですよ。いつお帰りになるか知れないから、今のうちにおへやのおそうじをして、そこらをきれいにしておきましょう。」

こういって散らかったおへやの中を片づけはじめますと、娘も小さなほうきを持って、お庭をはいたりし

ました。

するとその日の夕方、おとうさんは荷物をしょって、

「ああ、疲れた、疲れた。」

といいながら、帰って来ました。その声を聞くと、娘はあわててとび出して来て、

「おとうさん、お帰りなさい。」

といいました。おかあさんもうれしそうに、

「まあ、お早いお帰りでしたね。」

といいながら、背中の荷物を手伝って下ろしました。娘はきっとこの中にいいおみやげが入っているのだろうと思って、にこにこしながら、おかあさんのお

手伝(てつだ)いをして、荷物(にもつ)を奥(おく)まで運(はこ)んで行きました。そのあとから、おとうさんは脚絆(きゃはん)のほこりをはたきながら、

「ずいぶん寂(さび)しかったろう。べつに変(か)わったことはなかったか。」

といいいい奥(おく)へ通(とお)りました。

おとうさんはやっと座(すわ)って、お茶(ちゃ)を一杯(ぱい)のむ暇(ひま)もないうちに、包(つつ)みの中から細長(ほそなが)い箱(はこ)を出(だ)して、にこにこしながら、

「さあ、お約束(やくそく)のおみやげだよ。」

といって、娘(むすめ)に渡(わた)しました。娘(むすめ)は急(きゅう)にとろけそうな顔(かお)になって、

「おとうさん、ありがとう。」

といいながら、箱をあけますと、中からかわいらしいお人形さんやおもちゃが、たんと出てきました。

娘はだいじそうにそれを抱えて、

「うれしい、うれしい。」

といって、はね回っていました。するとおとうさんは、また一つ平たい箱を出して、

「これはお前のおみやげだ。」

といって、おかあさんに渡しました。おかあさんも、

「おや、それはどうも。」

といいながら、開けてみますと、中には金でこしら

えた、まるい平たいものが入っていました。

おかあさんはそれが何にするものだか分からないので、うらを返したり、おもてを見たり、ふしぎそうな顔ばかりしていますので、おとうさんは笑い出して、

「お前、それは鏡といって、都へ行かなければ無いものだよ。ほら、こうして見てごらん、顔がうつるから。」

といって、鏡のおもてをおかあさんの顔にさし向けました。おかあさんはその時鏡の上にうつった自分の顔をしげしげとながめて、

「まあ、まあ。」

といっていました。

二

それから幾年かたちました。娘もだんだん大きくなりました。ちょうど十五になった時、おかあさんはふと病気になって、どっと寝込んでしまいました。おとうさんは心配して、お医者にみてもらいましたが、なかなかよくなりません。娘は夜も昼もおかあさんのまくら元につききりで、ろくろく眠る暇もなく、一生懸命にかんびょうしましたが、病気はだんだ

ん重るばかりで、もう今日明日がむずかしいというまでになりました。

その夕方、おかあさんは娘をそばに呼び寄せて、やせこけた手で、娘の手をじっと握りながら、

「長い間、お前も親切に世話をしておくれだったが、わたしはもう長いことはありません。わたしが亡くなったら、お前、わたしの代わりになって、おとうさんをだいじにして上げて下さい。」

といいました。娘は何ということもできなくって、目にいっぱい涙をためたまま、うつむいていました。

その時おかあさんはまくらの下から鏡を出して、

「これはいつぞやおとうさんから頂いて、だいじにしている鏡です。この中にはわたしの魂が込めてあるのだから、この後いつでもおかあさんの顔が見たくなったら、出してごらんなさい。」

といって鏡を渡しました。

それから間もなく、おかあさんはとうとう息を引き取りました。あとに取り残された娘は、悲しい心をおさえて、おとうさんの手助けをして、おとむらいの世話をまめまめしくしました。

おとむらいがすんでしまうと、急にうちの中がひっそりして、じっとしていると、寂しさがこみ上げてく

るようでした。　娘はたまらなくなって、

「ああ、おかあさんに会いたい。」

と独り言をいいましたが、ふとあの時おかあさんにいわれたことを思い出して、鏡を出してみました。

「ほんとうにおかあさんが会いに来て下さるかしら。」

娘はこういいながら、鏡の中をのぞきました。するとどうでしょう、鏡の向こうにはおかあさんが、それはずっと若い美しい顔で、にっこり笑っていらっしゃいました。　娘はぼうっとしたようになって、

「あら、おかあさん。」

と呼びかけました。　そしていつまでもいつまでも、

顔を鏡に押しつけてのぞき込んでいました。

三

その後おとうさんは人にすすめられて、二度めのおかあさんをもらいました。

おとうさんは娘に、

「こんどのおかあさんもいいおかあさんだから、亡くなったおかあさんと同じように、だいじにして、いうことを聴くのだよ。」

といいました。

娘（むすめ）はおとなしくおとうさんのいうことを聴（き）いて、

「おかあさん、おかあさん。」

といって慕（した）いますと、こんどのおかあさんも、先（せん）のおかあさんのように、娘（むすめ）をよくかわいがりました。おとうさんはそれを見（み）て、よろこんでいました。

それでも娘（むすめ）はやはり時々（ときどき）、先（せん）のおかあさんがこいしくなりました。そういう時（とき）、いつもそっと一間（ひとま）に入（はい）って、れいの鏡（かがみ）を出（だ）してのぞきますと、鏡（かがみ）の中にはそのたんびにおかあさんが現（あらわ）れて、

「おや、お前（まえ）、おかあさんはこのとおり達者（たっしゃ）ですよ。」

というように、にっこり笑（わら）いかけました。

こんどのおかあさんは、時々娘が悲しそうな顔をしているのを見つけて心配しました。そしてそういう時、いつも一間に入り込んで、いつまでも出てこないのを知って、よけい心配になりました。そう思って娘に聴いても、

「いいえ、何でもありません。」

と答えるだけでした。でもおかあさんは、何だか娘が自分にかくしていることがあるように疑って、だんだん娘がにくらしくなりました。それである時おとうさんにその話をしました。おとうさんもふしぎがって、

「よしよし、こんどおれが見てやろう。」

といって、ある日そっと娘の後から一間に入って行きました。そして娘が一心に鏡の中に見入っているうしろから、出し抜けに、

「お前、何をしている。」

と声をかけました。娘はびっくりして、思わずふるえました。そして真っ赤な顔をしながら、あわてて鏡をかくしました。おとうさんはふきげんな顔をして、

「何だ、かくしたものは。出してお見せ。」

といいました。娘は困ったような顔をして、こわ

ごわ鏡を出しました。おとうさんはそれを見て、

「何だ。これはいつか死んだおかあさんにわたしの買ってやった鏡じゃないか。どうしてこんなものをながめているのだ。」

といいました。

すると娘は、こうしておかあさんにお目にかかっているのだといいました。そしておかあさんは死んでも、やはりこの鏡の中にいらしって、いつでも会いたい時には、これを見れば会えるといって、この鏡をおかあさんが下さったのだと話しました。おとうさんはいよいよふしぎに思って、

「どれ、お見（み）せ。」

といいながら、娘（むすめ）のうしろからのぞきますと、そこには若（わか）い時（とき）のおかあさんそっくりの娘（むすめ）の顔（かお）がうつりました。

「ああ、それはお前（まえ）の姿（すがた）だよ。お前（まえ）は小（ちい）さい時（とき）からおかあさんによく似（に）ていたから、おかあさんはちっとでもお前（まえ）の心（こころ）を慰（なぐさ）めるために、そうおっしゃったのだ。お前（まえ）は自分（じぶん）の姿（すがた）をおかあさんだと思（おも）って、これまでながめてよろこんでいたのだよ。」

こうおとうさんはいいながら、しおらしい娘（むすめ）の心（こころ）がかわいそうになりました。

するとその時(とき)まで次(つぎ)の間(ま)で様子(ようす)を見(み)ていた、こんどのおかあさんが入(はい)って来(き)て、娘(むすめ)の手を固(かた)く握(にぎ)りしめながら、

「これですっかり分(わ)かりました。何(なん)というやさしい心(こころ)でしょう。それを疑(うたぐ)ったのはすまなかった。」

といいながら、涙(なみだ)をこぼしました。娘(むすめ)はうつむきながら、小声(こごえ)で、

「おとうさんにも、おかあさんにも、よけいな御心配(ごしんぱい)をかけてすみませんでした。」

といいました。

底本：「日本の諸国物語」講談社学術文庫、講談社
１９８３（昭和58）年４月10日第1刷発行
入力：鈴木厚司
校正：佳代子
２００４年2月19日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。